

木材脱脂考

近ごろ木材の脱脂についていろいろ取りざたされているが、これについて少し考えてみたい。

現在県内ではアルカリ処理法とスピドラ法による脱脂、及び人工乾燥による方法の3種の処理法が、家具・建具・建築部材の製造の分野でそれぞれに、企業化されている。前二者は木材のなかからヤニを取出そうとする方法であり、人工乾燥の場合はヤニを木材中にふうじ込めようとするものである。

そこでまずヤニを考えてみよう。ヤニの成分を大まかに分ければ、ロジン質と称する固形分と、芳香揮発性の精油成分とからなり、両者が適度に混合されるとドロリとしたヤニになる。

木材中にヤニがどのくらいあるのかは、つきとめられた例は未だない。

我々が日常使用している家具或は家の柱・建具からヤニが出ると衣類を汚し不快感をもつ。このヤニは不快なだけで不要な存在かと云うとそうでもない。

ある例では、脱脂すると木材の強さが10%程低下し、また材の艶をなくし、脆く、欠け易くなる。今のような塗料がない時代は、家具や柱類には「トノ粉」を塗った。この「トノ粉」(多分に粘土質)と、材からしみ出すヤニが溶合し毎日の雑巾で磨き込まれて古代色に仕上がったといえる。

このように見ると、ヤニは強さや、艶を出す有効成分と云えるが、柱等から流れ出すのは困ることである。柱等も建築後、年を経れば材内のヤニの精油成分は揮発し流れ出なくなる。しかもロジン質は材中に残るため、強さ・艶はそのままで美しい。また集成接着の場合でもヤニは全く考えなくても良い程科学は進んでいる。これ等を考えればヤニを無理に取りのぞかず、流れ出ない程度に処理し自然に近い状態で使いたいと強く感ずる昨今である。

(林産部長 三村 典彦)